

『相模湾沿岸地域ゆかりの名士Ⅲ(湘南編)』展

展示期間 平成30年1月5日(金)～12月16日(日)

いあいさつ

本年の特別展は、相模湾沿岸地域にゆかりの名士を取り上げた3回シリーズの最終章となる「湘南編」です。過去2回の「大磯編」と「西部編(二宮～下田)」では、明治初期から半ばにかけて、維新の功労者を始め、政財界の要人や軍人、官僚など各界の名士らが、競うように風光明媚な相模湾沿岸に参集した様子を、そして徳富蘇峰とどのような交流を図ったのかを考察しました。

今回の「相模湾沿岸地域ゆかりの名士(湘南編)」展では、蘇峰とも関係の深い逗子・葉山を始め、横須賀、鎌倉、藤沢、茅ヶ崎、平塚と、今も首都圏近郊の人気リゾート地として不動の人気を誇る「湘南地域」に、一世紀以上も前よりその礎を築き、住まい訪れた貴顕紳士を取り上げます。

明治20(1887)年、東海道本線が横浜から国府津まで延伸され、また2年後の横須賀線開通によって、藤沢や大船、逗子などの各駅を利用し、東京や横浜より多くの人々が湘南地区を訪れました。時あたかも大磯では日本最初の海水浴場が開かれ、また国民病とされた結核には潮風や海水が良いとされ、療養所需要も高まりを見せ始めていました。岩倉使節団が見聞きした欧州型海浜リゾートへの憧憬、また御用邸や海外からの

賓客をもてなす迎賓館も相模湾沿岸地域に設営され、その周辺、例えば大磯や小田原には伊藤博文や山県有朋、田中光顕などの重鎮が控えました。葉山にも御用邸が造営され、東京により近い湘南に多くの都人士が集ったことは想像に難くありません。

蘇峰と湘南との関係は、郷土の水俣に似ているという理由から、明治29年に両親のため逗子に住まいを構えたことに始まります。当時は小さな漁村に過ぎなかった逗子を、蘇峰の弟・蘆花は、小説「不如帰」や「自然と人生」に描き、その名を全国に広めました。そんな逗子と程近い葉山地区には、桂太郎や後藤新平、金子堅太郎、小村寿太郎など多くの政界要人が別邸を構えました。蘇峰は「新聞人」としての地位名声を日清・日露の両戦役によって確固たるものとしましたが、特に日露戦争に大きな影響力を及ぼした葉山重鎮との関係作りに、この逗子別荘も一役買ったと見ることができでしょう。蘇峰の著作や書簡にもそれを物語る記述がなされ、また「中央に於ける人物相関」が、まるで縮図を描くが如く、別荘地にも投影された様を過去2度の展示でも目にし、また俯瞰してきました。

蘇峰が「観瀾亭(かんらんてい)」と名付けた逗子別荘の書齋からは、相模湾を正面に、箱根連山から伊豆半島、そして江ノ島越しに富士の雄姿が望めたといえます。遙か海岸線を見渡しつつ、シャナーリスト・蘇峰は、別荘に憩う大物一人ひとりの顔を思い浮かべ、その時々どう対峙し協働すべきか、策を練り筆を執ったことでしょう。相模湾の地に早くから目を着け、そして住まった徳富蘇峰。海に開くその愛用の書齋は、さながら荒波に向かう船の艦橋のような、そんな役割を担っていたのかもしれません。

平塚

ひらぬま きいちろう

平沼 騏一郎

慶応3年〜昭和27年(1867〜1952) 岡山県

政治家。検事総長・大審院長・法相・貴族院議員・枢密顧問官を経て、昭和14年、第35代内閣総理大臣に就任。その間、国家主義団体「国本社」を主宰。第二次大戦後、A級戦犯として終身禁錮刑に処せられ、獄中で病死。書を能くし、謡曲・能楽等にも秀でる。

★現・花水台に別荘を所有していた。

◆展示名刺

紹介 代議士林平馬君 男爵 平沼騏一郎 徳富先生

(昭和14年の平沼騏一郎内閣で、鉄道参与官を務めた林平馬を蘇峰に紹介する名刺)

小川 平吉

明治2年〜昭和17年(1870〜1942) 長野県

政治家。政友会代議士。弁護士から政界に入る。法相・鉄道相を歴任。五私鉄疑獄事件に連座して入獄。国家主義者で、大陸進出を主張した。展示書簡は、大正14年、加藤高明内閣の司法大臣・横田千之助の死去による後任人事で、小川平吉が司法大臣に就任した際、国民新聞紙上のコラムにおいて小川新法相に蘇峰が送った激励に対して感謝を述べた内容である。

★大正10年に現在の平塚黒部丘付近に別荘を建て、「花水庵」と命名。孫にあたる宮澤喜一第78代内閣総理大臣は、関東大震災後しばらくの間「花水庵」で生活していた。JR東海道線平塚駅付近に小川平吉の名を冠した「小川跨線橋」が今も残る。

◆展示書簡 大正14年2月17日付

拝啓 益御清適奉賀候 扱今回司法大臣就任二付御来賀御厚賜を辱し加え国民紙上ニ于御昌言を賜り御芳情難有奉感謝候 方今国家多事之折柄鞠躬尽力□□回リ以て御貴意に奉答度存居候 不取敢御紙上御礼申上度此如御座候

二月十七日 平吉

蘇峰先生侍史

封筒表 青山南町六ノ三 徳富猪一郎様 侍史

封筒裏 東京市四谷区仲町二丁目十二番地 小川平吉

河井 酔茗

明治7年〜昭和40年(1874〜1965) 大阪府

詩人。本名は又平。東京専門学校中退。自らも詩を発表していた投稿雑誌「文庫」の記者となり、長く詩欄を担当。北原白秋、川路柳虹ら多くの詩人を輩出した。夫人の島本久恵と協力し、女性詩歌人の育成にも力を注いだ。展示書簡では、自著『明治代表詩人』に対する蘇峰の書評への感謝を伝えている。

★大正11年に、娘の結核療養のため杏雲堂平塚病院の東側に居住していた。

◆展示書簡 昭和12年6月9日付

啓上 昨夕東日紙上に於て拙著明治代表詩人の御高評を拝見し 誠に意外の幸福に感じました 拙き意の在る処を御明察下さいまして本懐に存じます 孰れ拝芝の機を得千万謝意を表したく存じて居りますが不取敢以書中右謹んで御礼申上ます 敬具

六月九日

河井酔茗

徳富蘇峯先生 侍曹

封筒表 大森区山王町一丁目 徳富蘇峯先生 親披

封筒裏 東京市目黒区中目黒四丁目一四八〇 河井醉茗

茅ヶ崎

たかた こうあん

高田 畊安

文久元年〜昭和20年 (1861〜1945) 京都府

医師。ベルツに師事し、明治29年東京神田駿河台に東洋内科医院を設立。新島襄に師事し、キリスト教に入信している。妻は勝海舟の孫娘・輝子。

★結核で兄を亡くし、自身も結核で療養した体験から、明治32年神奈川県茅ヶ崎に結核診療のためのサナトリウム「南湖院」を開設。病舎は14棟、病室は158室、東洋一といわれた。患者には国木田独歩、八木重吉などがいる。蘇峰の長男太多雄、次男万熊も結核で入院している。南湖院は昭和20年に海軍に接收され解散した。

◆展示書簡 明治40年11月21日付

敬愛ノ尊大人ニ仰付ニテ 南湖院に柵御手植願度と存居候事ニ□□御丹誠之樟樹明年若クハ今年火曜日ニ於テ(乍恐縮尊大人御出張被下様)御手植被下度希上候也

十一月廿日 畊安

徳富先生座下

封筒裏 赤坂青山南町六ノ三〇 徳富猪一郎殿

封筒裏 神田区 高田畊安

川上音二郎

文久4年〜明治44年(1864〜1911) 福岡県

「オッパケペー節」で一世を風靡した興行師、芸術家、新派劇の創始者。川上の始めた書生芝居、壮士芝居はやがて新派となり、旧劇(歌舞伎)をしのぐ人気を博した。「新派劇の父」と称される。

★川上音二郎・貞奴夫妻は海外公演から帰国した明治35年、茅ヶ崎の高砂に別荘を建て、「萬松園」と名付けた。(現在の茅ヶ崎市立美術館の一角)明治36年には東京「明治座」でシエークスピアの「オセロ」を日本で初演し、この舞台で貞奴は日本の女優一号としてデビューした。この舞台の稽古が行われたのは、現在も残る「旅館茅ヶ崎館」(国指定有形文化財)である。かつて「萬松園」のあった高砂緑地には音二郎・貞奴の記念碑が建てられている。

◆展示書簡 明治32年6月28日付

拝啓一座演劇八昨廿七日バッキンガム王宮内ニ於テ英国皇太子殿下ウ
エールズ親王ノ上覧ヲ忝フシ、終演後特ニ拝謁ヲ賜ヒ尚賞与金トシテ
貳千円下賜相成候 右ハ生苦ノ面目之御座候俛此如不取敢御報告申上
候 敬具

明治三十二年六月廿八日 英国倫敦 川上音二郎

葉書表 日本東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様

原安三郎

明治17年〜昭和57年(1884〜1982) 徳島県

実業家。日本化学会長、東洋火災海上保険株式会社(現・セコム損害保険)初代会長などを歴任し、日本財界の重鎮として活躍した。徳島市名誉市民。

★大正8年に川上貞奴から「萬松園」現在の茅ヶ崎市美術館を購入し、別荘「松籟荘」とした。

◆展示書簡 昭和11年5月19日付

拝啓 本春は気温不順にて誠に難渋處 筆硯益御清逸奉賀候 御近状は御筆陳又講演にて嬉しく拝見仕候 阿部賢一様より御身辺の百々の伝聞仕候 然るに此頃顔面神経痛にて熱海に御静養の由も聞及候此療

治につき諸方面上ノ口口御効が欠けたらさると存じ 矢張之れに連関して按摩士をば御推薦御受納候て 実は弊方へ八二十年近く参候 茅ヶ崎浮田老人(浮田和民)にも試二成功実験済之者にて金谷つた女史なる人に有之候 同人は先ず姉大久保様にも十八年以来御邪魔し療治申上候由 誠に精神家にて矯風会の方々にも御出入仕居候 先生の近状を聴き且口口尤も「あんま」可分面倒くさき人にも之無候 浮田和民と小生からにて御紹介御差支なき限り御引見の程御取扱被下度 御紹介まで 民

十一年五月十一日 原安三郎

徳富先生 硯北

封筒表 徳富先生 金谷つた女史紹介

封筒裏 東京市麹町富士見町一丁目十八番地三 原安三郎

平塚らいてう

明治19年〜昭和46年(1886〜1971) 東京

婦人運動家。本名は明。日本女子大卒。明治44年婦人文芸誌「青鞥」を創刊。創刊の辞「元始女性は実に太陽であった」は有名である。女性の解放を主張し、新しい女の生き方を実践。大正9年市川扇枝らと新婦人協会をつくり、婦人参政権運動をすすめる。戦後は反戦・平和運動に力を注いだ。

★茅ヶ崎で5歳年下の画家志望の奥村博史と出会う。大正4年からは結核にかかった奥村の療養のため、茅ヶ崎で過ごす。自身の小説の中で茅ヶ崎は「私の愛のふるさと」と記している。平成10年、市民有志の声もあって、高砂緑地に記念碑が建てられた。

◆展示書簡 大正15年10月6日付

拝啓 近著「女性の言葉」御贈り申上げました 御納め頂きたく存じます 御多忙の中へあまりにかつて過ぎた申し分では御座います

ご覧頂ければ、更にそれ以上御批評を頂ければこの上ない幸と存じます 御健康を御祈り申し上げます

十月六日 平塚明

徳富先生 御侍史

封筒表 京橋区加賀町国民新聞社 徳富蘇峯先生

封筒裏 十月六日 府下千歳村烏山住宅口口 平塚明

国木田 独歩

明治4年〜明治41年(1871〜1908) 千葉県

小説家、詩人、ジャーナリスト、編集者。幼名を亀吉、のちに哲夫と改名。蘇峰の民友社に入り、「国民新聞」の記者として日清戦争に従軍。戦地から弟の収二宛てに送った「愛弟通信」で一躍有名になる。日本基督教婦人矯風会の幹事・佐々木豊寿の娘・信子との結婚・離婚問題では、蘇峰の世話になっている。

★明治40年から茅ヶ崎の南湖院で結核の療養をしていたが、明治41年6月23日に38歳で亡くなった。展示中の書簡は、南湖院に入院中の独歩からの葉書であり、この手紙を書いた1ヶ月半後に逝去した。

茅ヶ崎公園野球場のスタンド裏に、追憶碑が建つ。碑には「渚 永劫の海に落ちてゆく世世代代の人の流れが僕の前に横たわって居る 独歩」と刻まれている。

◆展示書簡 明治41年5月6日付

肅啓 又もや佳菓御恵送被下難有存候 昨日は又淇水老先生御見舞被下難有存候 八十七才のご老体にして実に丈夫の態あり 来年米の御祝まで小生も如何にても生き度き者と存候

葉書表 東京赤坂区南町 徳富猪一郎様

五月六日夕 南湖院 国木田哲夫

藤沢・辻堂

ひろた こうき

広田弘毅

明治11年～昭和23年(1878～1948) 福岡県

外交官、政治家。外務大臣、内閣総理大臣(第32代)、貴族院議員などを歴任した。第二次世界大戦後の極東軍事裁判で文官としては唯一のA級戦犯として有罪判決を受け死刑となった。

★昭和5年鶴沼松が岡に別荘を建設。昭和11年首相に就任すると、鶴沼石上から広田弘毅別荘までの道路がアスファルト舗装された。妻の静子は東京裁判開始直後の昭和21年5月に、ここ鶴沼の家で服毒自殺をした。

◆展示書簡 昭和11年5月付(印刷)

拝啓 陳者第六十九回帝國議會閉院式当日正午閣員一同より永田町官舎に御招待申上度候間何卒御貴臨被下度 此段御案内迄得貴意候 敬
具

昭和十一年五月 内閣総理大臣 廣田弘毅
貴族院議員 徳富猪一郎殿 服装 御随意

封筒表 大森区山王一ノ二八三一 貴族院議員 徳富猪一郎殿

長谷川一夫

はせがわ かずお
明治41年～昭和59年(1908～1984) 京都府

戦前から戦後にかけて、二枚目の時代劇スターとして活躍。同時代の剣戟俳優である阪東妻三郎、大河内傳次郎、嵐寛寿郎、片岡千恵蔵、市川右太衛門とともに「時代劇六大スタア」と呼ばれた。歌舞伎界から松竹に入り、松竹時代劇の看板俳優となった。その後東宝、大映と移り、300本以上の作品に出演。舞台やテレビドラマでも大きな活躍を見せており、晩年には宝塚歌劇『ベルサイユのばら』の初演で演出を行った。没後、俳優初の国民栄誉賞を受賞。

★昭和30年ごろ、鶴沼に別荘を建設し、しばしば滞在した。

◆展示書簡 昭和17年2月

輝かしい戦勝の春を迎えて皆様には愈々御元気の御事とお喜び申上げます。扨、此の度私共は新演伎座を創立し、来る三月一日から二十五日迄、東京宝塚劇場で第一回旗拳公演を致すこととなりました。映画の上で長らく御愛顧を頂いてをります。皆様は今後は舞台の上からもお目にかゝれると思ふと、喜びに胸が躍るやうでございますが、何に分にも未熟な私共でございますから皆様のお力にすがってひたすら精進を続ける覚悟でございます。私共の拙い演技が少しでも皆様のお気に召しましたら、これに越した喜びはございません。どうぞ、皆様、私共をお見捨てなく、末長くお引き立て下さいませよう偏へに願ひ申上げます。第一回旗拳公演の前に簡単な御挨拶申上げる次第でございます。

新演伎座 長谷川一夫

山田五十鈴

封筒なし

近藤賢二

こんどう けんじ
明治7年～昭和23年(1874～1948) 兵庫県

実業家。同志社卒。台湾総督府で後藤新平の書記官を経て実業界に入る朝日スリート、日本カーボン、眞崎大和鉛筆(現・三菱鉛筆)社長、横浜鉄道・横浜電気鉄道の常務など歴任。横浜商工会議所常議員として横浜の発展に尽力した。

★大正14年、近藤別荘は藤沢市辻堂の松林に建てられた。子供11人と、この別荘で過ごす時間を大切にしていたそうである。建築家はフランク・ロイド・ライトの弟子の遠藤新で、和洋折衷の代表的な建物といわれている。建て主の近藤賢二没後、所有者が変わり、老朽化に伴って取り壊し

が決定されたが、建築家、近隣住民などの熱心な保存活動により、現在の地(藤沢市民会館前庭)に移築保存された。登録有形文化財である。

◆展示書簡 昭和14年7月31日付

自作の西瓜二ヶ差上候間 先生に於て御笑味被下候はば光栄に奉存候 尤中身の程は何とも分り不申 定めて不出来と存候

葉書表 東京市京橋区木挽町二ノ十七 南胃腸病院内 徳富猪一郎様

令夫人様

神奈川県辻堂 近藤賢二

鎌倉

なつめ そうせき

夏目漱石 明治元年〜大正5年(1867〜1916) 東京

小説家・英文学者。本名金之助。東京大学英文科卒業。松山中学校教師、第五高等学校教授、イギリス留学などを経て第一高等学校、東大の教壇に立った。高浜虚子の勧めで写生文を手がけ、『吾輩は猫である』の成功から職業作家を志し、一切の教職を辞して「朝日新聞」に入社。同紙に名作を次々に発表した。俳句・漢詩・書画もよくした。

★明治27年末から翌年にかけて、神経衰弱の治療を図るため、円覚寺の塔頭・帰源院に止宿した漱石は、当時円覚寺管長だった釈宗演に参禅。その体験は小説『門』に描かれた。帰源院内には、夏目漱石の句碑「仏性は白き桔梗にこそあらめ」が建てられている。明治30年の夏にも鎌倉の材木座に1ヶ月ほど滞在している。

蘇峰は新聞コラムで「夏目君とは、時代を回うして、遂ひに膝を交へて語るの機会を得なかつた。然も其の風采には屢ば接し、且つ文書を交換したることも一再はあるやに記憶する」と書いている。

◆展示書簡 明治42年2月9日付

拜啓 御刊行の横川和尚撰五山百人一首 二百部のうち第五百十号先日高浜虚子の手より正に落掌 難有御礼申上候 日常御多忙の折 這般の風流に閑日月を弄せられ候御余裕 羨敷限に候 正是雪村老漢の鏝湯炉炭起清風の一句に相当するものと存候 頃日机辺に集積する所の書巻は悉く生存競争の臭味有之 久振にて此好事の雅集に接し 晒懐頓に一碗の苦茗を喫したるの感有之 たゞ俗用蝟集静かに緬邈の趣を致す能はず 王腕和尚の軒前修竹縁娑婆 玉立三竿不用多 好是満山 風雨夜 虚心相对亦他無の一首を挙げて感謝の辞に代へ申候 草々頓首

二月九日

夏目金之助

蘇峯先生 侍史

封筒表 京橋区日吉町四 国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 牛込早稲田南町七 夏目金之助

釈宗演 安政6年〜大正8年(1860〜1919) 福井県

臨済宗の僧。号は洪岳、楞伽窟。慶応義塾卒。京都妙心寺で得度ののち鎌倉円覚寺で今北洪川に参じて印可を得る。セイロン(スリランカ)に留学、インド、タイ、中国を歴訪。円覚寺、建長寺の管長を兼任。臨済宗大学(花園大学)の学長も務めた。明治26年シカゴの第1回世界宗教会議に出席。初めて欧米に禅(禪)を紹介。その後も鈴木大拙と共に世界に禅を喧伝した。

★宗演の下には鈴木大拙、夏目漱石、徳富蘇峰らが参禅し、大正期に禅ブームを巻き起こした。明治38年には東慶寺の管長となり、大正5年には円覚寺管長に再任された。宗演は漱石の葬式で引導を渡している。東慶寺に釈宗演を訪ねた中村是公(満鉄総裁)と漱石が、並んで立ち小便したことを記念する碑が東慶寺門前に建てられている。この時の様子を宗

演はすべに阿部充家に手紙で知らせている。

◆展示書簡 大正5年6月24日付

華翰難有拜見仕候 御来示の如く這回一般野兎閑神の草廬を伺ふ所となり肉薄 懶眠を驚かされ候て終に一派の犠牲と相成り再び醜面皮を世上に暴さねばならぬ事と相成り真に忸怩之至に御坐候 老婦再嫁の一言吾兄同情の厚きに因らずんば 余人の口よりは聴く事を得ざる親言と存じ申候 今更申すも愚痴の至に候得共 衲は元来江湖一箇の殉道者を以て私に自ら任じ居候者なり 一方より云へは管長制度廃止論者に有之候 但々時氣機未到 凡衆不容予説ため快々今日に至り申候 然るに這回亦一派の情実に迫られ事茲に及び申候事乍自分如何にも臍甲斐なき奴つと存じ申候 併一たび點頭致し候上は佛祖へ報恩の為と存じ自ら驚骨に鞭ち直前勇往仕べくと決心仕候間 老兄亦外護御同情を垂れられん事 千祈万禱の至に御坐候 右卑答得高慮度 草々如是に御坐候 謹言

封筒表 東京市青山南町六ノ三十 徳富蘇峯先生

封筒裏 六月廿四日 相州鎌倉山之内松ヶ岡東慶寺 釈宗演

◆展示書軸 釈宗演書幅(達磨絵)

山色溪聲 劈開面目

(後日、84歳の蘇峯が画賛を入れている)

鎌倉東慶寺に眠る蘇峯と交友のあった名士たち 蘇峯宛書簡数も明記

◇釈宗演 (臨済宗の僧・42通・今回展示中)

◇鈴木大拙 (仏教哲学者・1通・今回展示中)

◇阿部充家[無仏] (国民新聞副社長・京城日報社長・142通・今回展示中)

◇安倍能成 (哲学者・教育者・学習院院長・1通)

◇岩波茂雄 (岩波書店創業者・3通)

◇川田順 (歌人・81通)

◇中村汀女 (俳人・2通)

◇野田卯太郎[大塊] (実業家・政治家・92通)

◇石井光雄 (日本殖産銀行総裁・8通)

◇野上豊一郎 (英文学者・能楽研究家・1通)

◇野村洋三 (実業家・ホテルニューグランド会長・2通)

◇渡辺弥幸 (実業家・朝鮮殖産銀行筆頭理事・3通)

◇松野鶴平 (政治家・実業家 野田卯太郎の娘婿・3通)

高浜 虚子 明治7年〜昭和34年 (1874〜1959) 愛媛県

俳人・小説家。本名・清。正岡子規に師事する。「ホトトギス」を主宰、客観写生・花鳥諷詠を主張し、俳句の普及と後輩の育成に努めた。写生文・小説もよくし、『鶏頭』『俳諧師』『柿二つ』などの創作がある。明治41年から43年まで「国民新聞」の国民文学欄の編集を担当した。昭和9年9月の「日日だより」で蘇峯は虚子を次のように評している。「虚子君は写生文の大家であるが、然も君の写生は世の所謂る写生でなく、眼に別眼あり、手に別手あり。一寸誰にも真似が出来難い」と。

★明治43年一家で鎌倉の由比ヶ浜に移住。東京のほととぎす発行所へは、江ノ電と横須賀線を利用して通勤していた。昭和34年鎌倉で亡くなる。墓所は寿福寺。由比ヶ浜の虚子庵址に「波音の由比ヶ濱より初電車」の句碑が建っている。虚子の娘・星野立子とも蘇峯は交流を持った。

◆展示書簡 大正9年6月28日付

拝呈 さて昨日は御寵招を忝し御家族皆様御心からの御歓待を忝しまことに一日の歴遊を擅まにし難有存じ乍大略御書面御礼申上候 何卒皆様に宜敷御鳳聲奉願候 匆々拝具
六月二十八日 清

蘇峰先生 座右

封筒表 神奈川県逗子町 徳富蘇峰先生

封筒裏 東京市牛込区船河原町十二番地 ほととぎす発行所高濱虚子

むつ ひろさち

陸奥 広吉 明治2年～昭和17年(1869～1942) 大阪府

華族、外交官、教育者。陸奥宗光の長男。伯爵。駐ベルギー特命全権公使、鎌倉女学院校長。

★喘息の為、大正元年に鎌倉の由比ヶ浜に移住。田辺新之助が創立した鎌倉女学院の初代理事長として経営に参画。洋画家黒田清輝らと鎌倉同人会を結成し、鎌倉国宝館の開設や松並木の保全など市民活動団体の先駆けとなった。妻のエセル(日本名イソ)は多くの社寺を訪ね、『Kamakura Facts and Legend』(1918)をまとめた。

◆展示書簡 大正7年9月21日付

芳書拝読勿来久敷御目に懸り不申得候處 愈御安泰奉大賀候 扨荊妻 著書御覽被下候口を口る 特二御懇辞賜り千万忝奉存候 御厚意の次第同人二申聞候處 誠一光栄ノ至りと深く恐縮罷在厚ク御礼申上度申 遣候 其中久々にテ拝光の幸福ヲ得度と希望罷存候得共 不取敢右一 応ノ拝謝論まで如此二候 冷気日々相加申候折 為邦家御自愛是祈候 匆々頓首

九月念一 陸奥広吉

徳富猪一郎様

封筒表 東京赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎様

封筒裏 九月廿一日 神奈川県鎌倉町由比浜 陸奥広吉

うちやま えいほ

内山 英保

明治元年～昭和20年(1868～1945) 石川県

実業家。号は越山荘。原三溪と出会い、原合名会社に入社。横浜興信銀行(現横浜銀行)経営に参画した。

★内山の鎌倉にある邸宅の山頂に建てられたサロンは与謝野鉄幹により「冬柏山房」と命名され、鉄幹・晶子夫妻をはじめ、吉井勇、石井柏亭、尾崎弴堂(行雄)ら多くの文人が訪れた。昭和11年の1月5日、徳富蘇峰夫妻は熱海よりの帰途、藤沢で内山英保に迎えられて鎌倉に向かい、扇ヶ谷の内山邸冬柏山房を訪ね、昼食を要山の香風園で馳走になったという記録が残っている。

◆展示書簡 昭和11年2月14日付

「山房消息 第九号」同封「蘇峰先生を描く(一)」掲載

蘇峰先生を描く(一)

描くと大きく出たものゝ、実は少年時代から図画と作文が大下手で、作文は三国志や八犬伝を耽読せる十五六歳以後少しく転換したが、図画の方には其機会無く、中年に成つて多少鑑賞趣味は出て来たものゝ、習ひ気には遂々成れなかつた位だから、どうせ小供の自由画よりも間の抜けた物を描くに過ぎない。無論先生の御心境などに就ては及びもないと諦めているので、切めて観た儘の素描でもと云ふ者から、厚がましくも正直に斯くは題した次第である。尤、素人の氣落さには、どんな不味い物を描いたとて先生のお叱も出まいし、又何度でも描直す位の勇氣は有るから、読者よどうぞ笑ひ捨てゝ下さい。

初めて先生に御挨拶したのは、故与謝野寛先生還暦祝いの席であった。先生が佐々木信綱大人と立話をしてゐられた所へ通掛つて、佐々木大人へ御挨拶をした序ながら先生へは只、黙礼を捧げて直に立去つたのである。此時には近く拝顔したと云へる程のゆとりが無かつた。其賀宴でも、前の晶子夫人五十年の賀宴でも、先生の卓話を伺つたのだが、前の時はメインテーブルの先生に近い卓に居て、お話は好く聴えただけども、お顔は近視の私に判然と印象し得なかつたし、後の時は私も

メンテナンスの片端を汚してゐたので、中央部の先生を全く見るこ
とが出来なかつたから、此等の場合に得た所の淡い実感と雑誌や新聞
で散見したお写真、ラヂオで聴いたお聲、それに御著書からの印象な
ど取交せて出来上つた或幻影は、従来も私の胸中に存在してはゐたが、
然し其は甚、臆気なる一個の静物でしか無かつた。

実は、三年前『冬柏山房抄』の編纂を思立つた頃から先生の御一遊を
と窃かに切望しながらも、何分山も人もお耻しい代物なので態々願出
る程の勇氣も無かつたが、挽歌『師を哭く』を物した時、之を故師の
縁に由りて差出す事は非礼ではあるまいと考へて恐る恐る先生の清覽
にも供へた。所が、一日皮を切ると図々しくなるもので其続篇を載せ
た『山房消息』の創刊号をも差出し、続いて故師の絶筆と思はるゝ、
「冬柏山房の記」を謹載した第三号を差出す時には特に拙文をも添へ、
此山房記だけは是非お眼を通して頂きたいなどと積極的に申上げた程
である。言はゞ、一度此山も見て頂きたいと云わぬばかりに、大胆に
も往昔より衷心尊敬せる我蘇峰先生に一寸或誘惑をお試み申上げた容
にも察れるので、この正月五日に折角お立寄を頂いた其後では「能く
もあんな山を見せて大切の時を浪費させたものだ、兎角十路盤（そろば
ん）屋は千萬長者でも自称落伍者でも油断のならぬ奴ばかりだ」と先生
が苦笑なされはすまいかと、疵持つ脚許が今も戦々してゐるのだから、
描く所は尚更に怪しい物である。

封筒表 東京大森区山王 徳富蘇峰先生侍史

鎌倉千葉谷越山荘 山房消息 敬具 内山英保

すずき だいせつ
鈴木 大拙 明治3年〜昭和41年(1870〜1966) 石川県

仏教哲学者。本名は貞太郎。学習院大学・大谷大学教授。帝国大学在学
中に鎌倉円覚寺の今北洪川、釈宗演に参禅した。釈宗演より「大拙」の
居士号を受ける。数次にわたって欧米に渡り、英文で仏教、特に禅を紹

介し、東西の思想・文化の交流に大きく貢献した。展示書簡は大正9年
に上海から出されたもので、ちょうどその年大拙は、大谷大学教学研究
所東亜教学部部長に就任している。

★晩年は鎌倉に住み、昭和21年に東慶寺の境内に仏教文庫として「松が
岡文庫」を設立した。

◆展示書簡 昭和9年5月26日付

蘇峰老先生

拜啓 去る六日上海上陸以来見物やら会談やら日々忙殺の為體に有之
併し少なからぬ経験を獲 併せて又多少の意見も立ち申候 尚此から南
京に赴き一、三の人を訪問致しそれから北上の心算に有之候 帰国の
上は更にお目にかかる機会も可有之その節又縷述致度候 時節柄御自
愛專一と存候 頓首

五月二十六日

鈴木大拙

封筒表 日本東京市大森区入新井、新井宿 一八三二 徳富蘇峰様

封筒裏 中華民国上海西華徳路万歳館 鈴木大拙

(注)便箋にはサーベルの絵。「誓殺敵人」「救国箋」「臥薪嘗胆」と赤色で
印刷されている

よしかや のぶこ
吉屋 信子 明治29年〜昭和48年(1896〜1973) 新潟県

小説家。栃木県立高女卒。少女小説の作家として出発。穩健な道徳観に
基づいた家庭小説で人気を獲得。代表作は『良人の貞操』『鬼火』『徳川
の夫人たち』など。吉屋と蘇峰の交友は、吉屋信子の『私の見た人』に
よれば、大正11年に大森駅のホームで吉屋を見かけた蘇峰が「フルヤさ
ん」と声をかけたことから始まる。吉屋は「フルヤではありません。ヨ
シヤです」とはつきり訂正したそうである。

★吉屋は昭和37年に由比ヶ浜に移住した。邸宅の設計は吉田五十八によ

るもの。吉屋没後は鎌倉市に寄贈され、「吉屋信子記念館」として保存されている。

◆展示書簡 昭和12年8月31日付

ソ連国境軍の慰問に、主婦の友より参り、北鮮の洪水のあとを苦心して歩き、守備隊を御たづねいたし張鼓峯を眺めました。国境の原には秋草盛りでございます。

葉書表 朝鮮風俗「洗濯」の絵

葉書裏 山梨県山中湖畔双宜荘 徳富蘇峰先生

北鮮雄基にて 吉屋信子 八月卅一日

ながよ せんさい
長与 専齋 天保9年〜明治35年(1838〜1902) 長崎県

医者。緒方洪庵に師事。長崎でボンペに西洋医学を学び、のち長崎医学校長となる。岩倉遣欧使節に随行し、帰国後、文部省医務局長・東京医学校長を歴任。薬舗の医学試験制度の発足、防疫や検疫制度の導入、東京司薬場(国立衛生試験所)や牛痘種継所の創設など、医事衛生事業の基礎を確立した。「衛生」という言葉は、長与によってはじめて用いられたものである。

★長与は明治17年に、鎌倉の海を「海水浴の最適地」として推奨。由比ヶ浜には「海水浴場開場100年記念碑」が建つ。

かつて由比ヶ浜にあった、わが国最初の海浜サナトリウム「海浜院」(結核療養所)の設立にも携わっている。この海浜院に並んだ場所に長与の別荘は建てられた。明治27年の夏、次女が由比ヶ浜で溺死してしまうという不幸が起こり、鎌倉の別荘を売却した。長与専齋の長男・称吉、五男の善郎も鎌倉に住んだ。

鎌倉大仏の左側に建つ「松香長与先生紀功之碑」は、大正8年、町制25周年の記念事業の一つとして、日本衛生行政の基礎を築き、鎌倉の発展

に貢献した長与専齋の功績を長く伝えるために建てられたもの。

◆展示書簡 明治34年2月(14)日付陸奥

拜啓平素御疎情罷過多罪 文壇御清健ノ趣八日々国民紙上流書明歴ノ至奉拝賀候 陳八先日福沢翁長逝ノ節八以豚児悼辞御依頼申上候處早速御起草被成下以御蔭哀情相達難有奉鳴謝候 老拙儀八多年師友とし御厚誼を蒙候付枕上ノ看護板前之通夜相此節十分誠意を謁し可申候處此地養病罷在夫さへ任心底不申遺憾無窮候口去八日起坐費書輓詞一筆を賦之砌 追善ノ意を表候乍序左二附記し仰高批候

夙期文物萬邦口 健筆縦横衆蒙 千載朝昂稿草筆 単身鼓吹五洲風
口得廊廟簪纓貴 口此門口口李紅 四十四餘年空一夢 長夫

余卜先生始締交在安政二年 落日哭斯翁 太政

帰京ノ上趨庵御起草ノ御礼可申上心得候處 尔来兎角枕然仕兼今暫逗留保養可仕一心ノ展謝如斯旨に候 草々敬具

二月十四日 専齋拜

徳富先生文壇下

封筒表 東京京橋区日吉町四民友社 徳富猪一郎様 直展

封筒裏 伊豆熱海富士屋方 長与専齋敬具

まつかた まさよし
松方 正義 天保6年〜大正13年(1835〜1924) 鹿児島県

政治家。号は海東。明治期の日本において内閣総理大臣を2度(第4・6代)務めるとともに大蔵卿、大蔵大臣を長期間務め、日本銀行を設立。金本位制を確立し、財政面で業績を残した。また、晩年は元老、内大臣として政局に関与し影響力を行使した。

★松方正義の別荘「鶴陽荘」は鶴ヶ岡八幡神社の南にあり、総坪数約4千坪。敷地内には稲荷祠(高砂稲荷)があった。菊の花を愛する松方は、花壇を設け観菊会を開いていたという。大正12年9月1日の関東大震災

の日も鶴陽荘に滞在していたため、崩れ落ちてきた梁や柱に挟まれ怪我を負ったが、1時間後に助け出された。「松方公薨去」といった新聞号外もでたようだ。

◆展示書簡 大正(5)年4月2日付

大梅夜話御出版御分与御懇贈に預り乍毎御懇篤之段深謝之至に候將亦近日中葉山御別荘へ御出浮にも相成候得ば鎌倉へ御立寄被下候儀は相叶間敷や 及御相談度儀も有之 乍憚以書中御願試申候 尤拙者には来る八日頃迄は滞留之積に候 頓首

四月二日

正義 鎌倉より

徳富賢台下

封筒表 東京青山南町、徳富猪一郎殿

封筒裏 鎌倉 松方正義

◆展示書軸 松方正義筆 (王昌齡・七言絶句)

寒雨連江夜入吳 平明送客楚山孤 洛陽親友如相問 一片冰心在玉壺

海東書 (松方の雅言)

いのうえ かおる

井上馨 天保6年〜大正4年(1836〜1915) 山口県

政治家・公爵。号は世外・三猿、名は聞多。蘭学・砲術を修め、伊藤博文らとイギリスに留学、帰国後木戸孝允らと薩長連合に奔走する。維新後は新政府参与となり外交・財政の衝に当り、のち伊藤内閣の外相・内相・蔵相を務めた。

★明治21年に稲村ヶ崎上の別邸落成。稲村ヶ崎公園内の「稲村ヶ崎碑」は井上の妻武子が新田氏の出自であったことから、明治27年に別荘内に

建てられたものである。

◆展示書簡 大正(1)年8月2日

昨日尊書落掌仕候 其節御依頼之新紀元之字相認め候様との御事 実に御承知の通り愚生最下手之書に御坐候得共 御懇情に対し相認め申候 恐入候次第に御坐候 匆々拝復

大正 八月二日

馨

徳富老兄坐下

封筒表 徳富猪一郎殿

封筒裏 井上馨

ながお きんや

長尾 欽弥 明治25年〜昭和55年(1892〜1980) 京都府

実業家。総合健康薬「わかもと」の創業者。ビールの搾りかすから開発されたわかもとは宣伝の巧みさもあり、瞬く間に多くの人々が服用するようになり、巨万の富を手にした。長尾と妻・よねはその財力で、数寄者の理想を実現する本宅や別荘を次々と造築し、骨董を集め、政界人・文化人のスポンサーとなり、また各種団体へ寄付なども行った。

★長尾夫妻は鎌倉山に13万坪の土地を用意し、昭和6年から「扇湖山荘(せんこさんそう)」の建設を始めた。飛騨高山から移築した桃山期の養蚕農家を改築して母屋に、明治時代の伏見別邸に作られた茶室を移築し、昭和9年に完成した。建物の改築は、数寄屋造りで有名な建築家・大江新太郎が手掛けている。また広大な庭園は、山県有朋別邸や岩崎小弥太の別邸を手掛けた造園家・小川治兵衛によるものである。庭から眺める相模湾の景色が扇の形をした湖に見えることから「扇湖山荘」と名付けられたという。

◆展示書簡 昭和18年7月25日付

酷暑御征服益々御健勝奉賀候 時局八益々深刻化致し参り候處 小生

全事業を挙げて戦力増強ニ微力を捧げ居候處長尾研究所にて最近大発

見あり 軍の待望の一端を解決仕り候 之れハ疲勞解消ヒタミンなるも

其動力ハ广大にて老衰豫防 小兒養育等ニも及ぶものニ候 先生の御元

氣を旺盛とするハ疑ふ余地無之候間 本日別便御送り申上候 即刻御試

用是非共十年ハ若返られ度存上候 一日ニ錠宛三四回一日総量五六

錠位服用さるれば充分と存候 暑中御見舞ニ罷出度存居候も陣頭指揮

にて東奔西走寸暇無之乍勝手に書中御機嫌伺ひまで 如此ニ御坐候

匆々頓首

七月二十五日

蘇峰大先生 玉案下

封筒表 熱海市伊豆山押出一一九 晚晴草堂大先生 机下

封筒裏 東京世田谷区深沢町四 宜雨荘 長尾欽弥

欽彌 再拝

ありしま いくま

有島 生馬

明治15年〜昭和49年(1882〜1974) 神奈川県

画家。本名・有島壬生馬。有島武郎の弟、里見淳の兄である。藤島武二に洋画をまなび、ヨーロッパに留学後「白樺」の同人となり、セザンヌを日本で紹介した。二科会、一水会を創立。号は雨東生、十月亭。

★有島生馬一家は生馬の肺炎静養のため、大正9年に鎌倉稲村ヶ崎にあった新渡戸稲造の別荘に引っ越した。この別荘の近くにイタリアの生糸貿易商ヴィヴァンティが建てた洋館があったので、大正10年に購入し、亡くなるまでの50年間この家で過ごした。周囲に松が群生していたため「松の屋敷」と呼ばれ、二科会、一水会、黒門会等の日本近代洋画の活動拠点となり、山下新太郎、石井柏亭、与謝野寛・晶子夫妻、遠藤周作等の大正・昭和の多くの文学者・芸術家たちが訪れた。

◆展示書簡 昭和17年2月16日付

拝啓 戦時下御多端ノ折柄益々御健勝奉欣賀候 陳者皇港七御稜威ノ

下 皇軍ノ武勇に依里予期以上ノ戦果を挙げ 茲ニ芽出度陥落仕候事

邦家ノ慶事誠ニ極まれりと申すも過当に非ずと被存候 顧れば事変以

来先生御老体を忘れ寸陰を不捨俗論邦説を排撃し雄々しく輿論御指導

に御尽口被遊候事感激不堪次第に御坐候 將兵ノ武勲ハ昭に乎たりと

雖も先生筆硯の偉力よく今にあらしめしを惟ふ者果しく幾千ぞ不肖

今日街上二万歳の歓呼を聴き衷心より幾時の赤心を茲ニ披瀝するを何

卒寛容願上候 真ニ先生こそ千軍万馬にも勝る帷幄ノ老軍師請ふ永く

帝國將來ノ為メ御自愛ノ程切望ニ不堪 謹んで芒辞を献すること如斯

ニ御坐候 敬具

昭和十七年二月十八日 有島生馬

徳富蘇峰先生 侍史

封筒表 麹町区有楽町東京日々新聞社 徳富蘇峯殿 御直披

封筒裏 東京市麹町区六番町三 有島生馬

に と べ い な ぞ う

新渡戸 稲造

文久2年〜昭和8年(1862〜1933) 岩手県

教育家・思想家。国際平和を主張し、日米親善に尽力した。愛国心強くその著英文『武士道』は各国語に翻訳された。東大教授・東京女子大初代学長・国際連盟事務次長。

★海を臨む稲村ヶ崎の新渡戸稲造別邸は約300坪あり、有島生馬一家がこの別荘を借りて半年ほど住んだ。新渡戸は晩年この地でゆくり過ごしたいと考えていたようだが、鎌倉に落ち着くことはなかった。現在は聖路加看護大学セミナーハウスになっている。

◆展示書簡 ()年10月29日付

拝啓 陳者此書持参者川崎万蔵氏兼てより公共事業に趣味を有し殊に政治の方面には経験を有する人に有之候 今回先生に御会面の栄を得

度申出候間此書相添候間何分御引見願上候

十月二十九日

新渡戸

徳富先生

封筒表 徳富蘇峯先生 川崎万蔵氏持参

封筒裏 KOBINATA DAIMACHI 75 1-CHOME KOISHIKAWA

TOKYO 新渡戸稻造

陸 羯南 くが かつなん 安政4年〜明治40年(1857〜1907) 青森県

ジャーナリスト、評論家。本名は実。新聞「日本」の創刊者で社長兼主筆。国民主義の立場で政府批判の政治論説に健筆をふるった。正岡子規は新聞「日本」に在籍し、俳句、短歌の革新運動を展開した。

★病氣療養のため家族とともに鎌倉・長谷に転地後、現在の稲村ヶ崎駅から少々歩いたところ極楽寺に別荘を新築。「浦苦屋」と名付け、小野鷲堂(おのがとう)かな書道界の大家の筆による扁額を掲げた。明治40年、肺結核のため別荘で死去。展示書簡は、蘇峰が「国民新聞」を創刊する1年前の明治22年に陸から届いた年賀状である。

◆展示書簡 明治22年1月5日付

恭賀新年 併せて平素ノ疎濶ヲ奉謝候

明治廿二年一月四日 神田北神保町十一番地 陸実

葉書表 赤坂榎町五番地 徳富猪一郎様

岡田 信一郎 おかた しんいちろう 明治16年〜昭和7年(1883〜1932) 東京

建築家。早稲田大学、東京美術学校教授。東京の歌舞伎座、東京府立美術館、明治生命館、国民新聞の「青山会館」などの設計を手がけた。

★鎌倉国宝館は、関東大震災で鎌倉の寺社が大きな被害を受けたため、

文化財保存の観点から、昭和3年岡田信一郎の設計により建てられた。13
国の登録有形文化財。岡田の別邸はその近くにあり、こちらも自身の設計によるもの。

◆展示書簡 大正14年8月25日付

拜啓 御揮毫の御屏風御催促かましく頂戴仕り誠に有り難く存じ候
昨日帰宅仕り拜見致し一層歡喜致し居り候 茅屋の光輝に分らぬながら老人迄大喜び致し居り候 謹而御礼申上候 敬具

大正十四年八月廿五日

岡田信一郎

徳富先生 侍史

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯先生

封筒裏 八月廿五日 鎌倉雪ノ下三五五 岡田信一郎

芳川 顕正 よしかわ あきまさ 天保12年〜大正9年(1842〜1920) 徳島県

官僚、政治家。明治3年、伊藤の推薦で大蔵省に入る。東京府知事、内務次官などを経て第1次山県内閣の文相となり教育勅語の制定に尽力。その後も山県有朋の側近として法相、内相、逓信相、枢密院副議長を歴任。号は越山。男子に恵まれません、四女の鎌子に子爵・曾禰荒助の次男(芳川寛治)を婿養子とし家を継がせた。しかし大正6年に鎌子がお抱え運転手と不貞をはたらき、心中未遂事件(千葉心中)を起したため枢密院副議長を辞任せざるを得なくなりました。

★芳川の別荘は、海浜ホテルに隣接した別荘が立ち並び通り沿いにある。

◆展示書簡 明治43年4月19日付

拜啓 益御清栄奉欣賀候 陳八今般子爵曾禰荒助二男寛治ヲ養嗣子ト為シ四女鎌子ト結婚為致候二付 御披露旁粗茶差上度候間 来ル四月二

十九日午後二時華族会館へ御貴臨被下度 此段御案内申上候 敬具

明治四十三年四月十九日 伯爵 芳川顕正 同夫人貞子

徳富猪一郎殿

追テ御諾否テ御手数折返シ御一報願上候

封筒なし

で弔辞を述べている。

◆展示書簡 大正(5)年6月21日付

敬啓 不相替御多忙奉拝察候 大正の青年は毎日く拝読 頗る愉快を覚
え誠に孝明天皇御苦心之御模様感涙之外無之候 過日は小生方書生に
御伝言之趣奉深謝候 来月初御渡鮮之趣 小生にも来る日曜の早朝
医者に行く為め帰京仕候而其夕鎌行之念に御坐候 若し二十五日御在
京に候はゞ午後一時半比御来車被下候はゞ大幸に存候 右迄 頓首
六月廿一 兼武

徳富賢兄侍史

追而 御都合は二十四日に書生岩村に御示し被下度候

封筒表 東京青山南町六 徳富猪一郎殿

封筒裏 かまくら、大浦兼武

中村 是公

慶応3年〜昭和2年(1867〜1927) 広島県

官僚・実業家・政治家。南満州鉄道株式会社(満鉄)総裁、鉄道院総裁、
東京市長、貴族院議員などを歴任した。作家・夏目漱石は大学予備門以
来の親友であった。漱石の次男の伸六は、『父・漱石とその周辺』の中で
『恐らく、父が死ぬまで「お前、お前」と呼び捨てにしながら、学生時
代と少しも変わらぬ親しさを以って、附合うことの出来た相手は、中村
是公さん以外に誰も居なかったのではないかと思つ』と記している。

★中村是公の別荘は、光則寺入口の右手の高台にあった。漱石は明治44
年の7月にこの別荘を訪ね、翌日人力車で小坪まで出かけ、蛸をついた
という記録が残っている。

◆展示名刺

謹賀新年 東京市長 中村是公

大浦 兼武

嘉永3年〜大正7年(1850〜1918) 鹿児島県

官僚・政治家・子爵。戊辰戦争に参加後、警保局主事、島根・山口・熊
本県知事を歴任。山県内閣では警視總監となる。のち逓信相、桂・大隅
両内閣の農商務相と内相を務めた。

★大正4年、選挙違反が問題(大浦内相事件)となり依願免官、鎌倉に閑
居した。引退の3年後、鎌倉の長谷にあった別荘にて死去。蘇峰は葬儀

岩崎 小弥太

明治12年〜昭和20年(1879〜1945) 東京

実業家。弥之助の長男。三菱財閥第4代指導者。三菱合資を株式会社と
し、海運・商事・造船を中心とする財閥を完成させた。

★岩崎小弥太は鎌倉扇ヶ谷・千葉ヶ谷に約2万坪を超える広大な土地を
所有していた。この地に大正5年、母親(後藤象二郎の娘・早苗)の病氣
療養のため別荘を構えた。大正期の扇ヶ谷には庄清次郎(現・古我荘)な
ど三菱財閥重役の面々も同じく居を構えた。岩崎小弥太の別荘跡地には、
現在「鎌倉歴史文化交流館」が建っている。

◆展示書簡 大正4年11月15日付

拝啓仕候 晩秋の候益々御清適奉慶賀候 陳者小生に對し今回不凶叙
勲之御沙汰御発表相成候處早速御祝詞ヲ寄セラシ御厚志奉深謝候 不
取敢御礼申述度如此御座候 敬具

大正四年十一月十五日 岩崎小弥太

国民新聞社長 徳富猪一郎様

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 岩崎小弥太

くろだ せいぎ
黒田 清輝 慶応2年〜大正13年(1866〜1924) 鹿児島県

洋画家。清綱の養嗣子。渡仏してラファエル・コランに師事。帰国後、外光派の画風を日本に導き入れ、久米桂一郎とともに天真道場を開き、のち「白馬会」を設立。また、東京美術学校西洋画科で指導に当たり、日本の洋画界発展に寄与した。貴族院議員としても活躍。

★鎌倉材木座の「啓運寺」の本堂をアトリ工にして「雲」「鎌倉にて」を描いた。黒田は明治45年頃鎌倉に別荘を所有し、大正3年に新築している。「啓運寺」のそばにある銭湯「清水屋」が黒田の別荘跡であるという。黒田は鎌倉同人会の結成にも尽力した。

◆展示書簡 明治44年9月30日付

拝復益御多祥奉賀候 陳者御尊父様九十歳ノ御記念ヲ御迎被遊 大慶ノ至と奉存候 又翁御祝慶ナル御品御贈与被成下難有拝受仕候 幾久敷保存罷候 先八御礼二當御祝詞申上度 如此御坐候 敬具
九月三十日 黒田清輝
徳富猪一郎様

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎様
封筒裏 麴町区平河町寺口十四番地 黒田清輝

かいおんじ ちやうじろう
海音寺 潮五郎 明治34年〜昭和55年(1901〜1977) 鹿児島県

小説家。本名は末富東作。虚構を排した歴史小説作家の第一人者として

史伝文学の復興に貢献した。『天正女合戦』『武道伝来記』で直木賞受賞。他に『西郷隆盛』『平将門』『天と地と』など。

★教師生活を辞して専業作家として最初に居を構えたのが鎌倉であった。鎌倉を舞台にした小説も多い。昭和9年からの1年間、鎌倉雪ノ下の借家に住んだ。展示書簡は国民新聞の社会部長として活躍した、ジャーナリスト・千葉亀雄の墓碑横に建つ記念碑の題字(「好学篤行」)を蘇峰が毫したことへの礼状である。

◆展示書簡 昭和13年10月4日付

謹啓 この度は御迷惑なる御願ひをいたしましたにもかかはらず御快諾を賜りまことに有難うございます 本日確かに拝受いたしました同人共皆感泣してをります 御高庇により立派な記念碑ができます 千葉先生の御霊魂も定めしお喜びであらせらるること存じます 拝趨御礼言上いたすべきでございますが、御多用の先生の御手間をかくのも却って失礼と存じますから略儀ながら寸堵もて御礼啓上まで尚 記念碑設立の工事は順調に進捗いたしておりますれば御放心下さいまし 敬具

十月十三日夜 海音寺潮五郎 村雨退二郎 再拝

徳富蘇峰先生御侍史

封筒表 大森区山王二丁目二八三一 徳富先生御内 並木仙太郎様御座下
封筒裏 渋谷区代々木上原二二二五 海音寺潮五郎 村雨退二郎

たなへ しんのすけ
田辺 新之助 文久2年〜昭和19年(1862〜1944) 東京

教育者、漢学者。号は松坡。唐津藩士の子。恩師・高橋是清の引き立てで共立学校(現開成中学校・高等学校)の漢文教師となった。東京開成中学校校長就任時に、逗子開成中学校、鎌倉女学校を創設した。

★逗子開成中学校は、横須賀の兵学校を出た軍人の子供たちのための学

校を作りたいという海軍の要請により設立された。校長在任中の明治43年にボート遭難事故が起こり、引責辞任。その後は、漢書籍の研究に専念し、田辺松坡の名で漢詩や書を発表した。墓所は寿福寺。

◆展示書簡 大正7年7月15日付

暑氣に入候處 益々御清祥奉欣賀候 陳者下平願上候度儀御坐候 友人比田井鴻号・天来氏一度先生二拝芝相願候度トテ小弟二紹介依頼御坐候二由り茲二拝呈仕候 同氏八日下部鳴鶴翁ノ社中ノ書家ニ有之信州人ニ御坐候 餘二六鳴鶴二翁共ト着目致居候 書道等学者ニ御坐候 今回別封差出候 書道館設立ノ企画有之候ニ付先生ニ是非御賛成相願度トノ趣意ニ御坐候 人柄活擔快闊ニシテ高潔 近頃珍敷書家ト被存候 其れ造詣ハ別封近業ノ写真版ニテ御承知相願度(漢籍ノ徒狐及造詣不浅)ニ多用ノ中恐入り候得共 御都合ノ日時同氏より電話ニテ御伺可申候間何卒御引見被成下度候 今回ノ拳ニ付テハ鶴翁頗力を入し居候 其他松方様口諸公賛成ニ御坐候間決シテ御迷惑ノ儀無之ト存候 右願上候 時下天暑ニ向候際御自愛相成度候 近頃折々老龍庵下ヲ経過頗懐旧ノ感ニ不堪候 右御願迄 草々頓首 七月十五日 新之助

蘇峰先生梧右

封筒表 東京赤坂区青山南町六丁目三十 徳富猪一郎様 侍史

封筒裏 鎌倉和田塚 田辺新之助

まえだ としなり
前田 利為

明治18年〜昭和17年(1885〜1942) 東京

華族、陸軍軍人。最終階級は陸軍大将。旧加賀藩主前田本家第16代当主。公爵。ボルネオ沖で戦死。

★鎌倉文学館の建物は侯爵前田利嗣の鎌倉別邸として明治23年頃に建設された建物である。明治43年火災により焼失。現在の建物は前田利為

が昭和11年に全面洋風に改装したものである。完成後はこの場所にか16つであった長楽寺にちなみ「長楽山荘」と命名されている。戦後、家族は敷地内の別の場所に移り住み、この別邸はデンマーク公使や佐藤栄作元首相が別荘として借り受けた。その後昭和58年、第17代当主である前田利達から鎌倉市へ寄贈された。

◆展示書簡 昭和7年2月26日付

徳富蘇峰先生古稀祝賀会出席通知葉書
(於帝国ホテル・サインは自筆と思われる)

はまぐち おさち
浜口 雄幸

明治3年〜昭和6年(1870〜1931) 高知県

政治家。東大卒。立憲同志会・憲政会に参加。蔵相・内相を経て立憲民政党の総裁となり昭和4年組閣第27代総理大臣。緊縮財政・金解禁を實施、ロンドン軍縮条約に調印。昭和5年東京駅頭で右翼に狙撃され、翌年死亡。その風貌と人柄から「ライオン宰相」と親しまれた。

★浜口の鎌倉に於ける最初の別荘は、バス停六地蔵付近にあり、かなり古びた建物であった。首相となり手狭になったことから、昭和4年から庄清次郎の別荘(現在の古我邸)に移った。この別荘で自身の回顧録でもある『随感録』をまとめた。この著書には凶弾に倒れた時の自身の様子なども記されている。

◆展示書簡 昭和2年5月30日付

拝啓 陳者此度ハ貴紙上に於て普選議会に送るべき議員一般推薦に依る当選者之一人として小生に記念の為肖像画御恵与被成下御厚志難有處納仕候 右御伝旁御礼迄申述度 此如御座候 敬白

五月卅日

浜口雄幸

国民新聞社 徳富猪一郎殿 座下

封筒表 京橋区加賀町国民新聞社 徳富猪一郎殿
封筒裏 府下 浜口雄幸

このえ ふみまろ
近衛文麿 明治24年〜昭和20年(1891〜1945) 東京

政治家。近衛篤磨の長男。京大卒。貴族院議長。昭和12年以降3度組閣。この間、大政翼賛会を創立した。第二次大戦後、戦犯出頭命令を受けて服毒自殺。

★近衛文麿は扇ヶ谷の古河邸を借りて別荘とするほか、昭和4年頃から開発された鎌倉山にも別荘を持ち、滞在した。

◆**展示書簡** 大正13年9月25日付

御令息様御病氣御養生不被為叶遂二御逝去被遊候由 驚愕仕候 御一同様御愁傷之程奉恐察候 先八年延引御弔申述度如此御坐候
大正十三年九月廿五日 近衛文麿

徳富猪一郎様
封筒表 市外大森町山王 徳富猪一郎様
封筒裏 市外落合町 近衛文麿

やまもと じょうたろう
山本 条太郎 慶応3年〜昭和11年(1867〜1936) 福井県

実業家、政治家。明治42年三井物産常務となり、シーメンス事件で退任。大正9年に衆議院議員。昭和2年政友会幹事長、満鉄社長(のち総裁に就任し、満州(中国東北部)の開発を進めた。茶人としても有名である。

★山本の別荘は大正7年に建てられた数寄屋造りの和風建築で、平成28年に国の登録有形文化財に指定された。

◆**展示書簡** 明治44年9月16日付

拜啓 昨日井上候二面会 十九日後四時小生同伴国民社二罷越見物後 木挽町田中屋二テ食事差出入様約束致置候間 野田君(野田卯太郎)ト 共ニ御出席御承引被下度候 匆々不
九月十六日 条太郎

徳富先生 机下

野田氏二八老兄ヨリ一寸御通置被下度候

封筒表 青山南町六ノ三〇 徳富猪一郎様 親展
封筒裏 駿河町三井物産会社 山本条太郎

こだま げんたろう
児玉 源太郎 嘉永5年〜明治39年(1852〜1906) 山口県

軍人。陸軍大将。陸軍大学校校長として、ドイツの軍制・戦術の導入に努め、台湾総督・陸相・内相などを歴任。日露戦争時は満州軍総参謀長、のち陸軍参謀総長を務める。

★鎌倉坂ノ下に別荘を持ち、毎週日曜日に静養に訪れていたが、別荘に多くの面会者が訪ねてくるようになり、江の島に新たに静養場所を作り避難していたそうである。児玉没後の大正8年、児玉を祀った「児玉神社」が島内に鎮座された。

◆**展示書簡** 明治32年12月9日付

拜啓 弥々御清栄之段欣賞此事に御坐候 過日御書面拝承仕候 即別紙拙文送呈致候 御採否如何は御勝手たるべき義に御坐候 当用迄如此 時下為邦家御自愛奉祈候 匆々
十二月九日 源太郎

徳富蘇峰兄侍史

封筒表 東京々橋区宗十郎町民友社 徳富猪一郎殿
封筒裏 台北 児玉源太郎

あべ みついえ
阿部 充家 文久2年〜昭和11年(1862〜1936) 熊本県

ジャーナリスト。号は無仏。同志社に学び、明治11年熊本新聞社長となる。明治24年「民友社」に入社し、国民新聞記者として活躍。明治44年国民新聞社副社長。大正4年から7年まで「京城日報」社長。朝鮮事情通として、寺内正毅・斎藤実両総督に助言を行った。

★蘇峰の腹心として「国民新聞」の発展に尽くした阿部の墓は、鎌倉東慶寺にある。墓の脇には、蘇峰の書による詩碑が昭和14年に建立された。

◆徳富猪一郎宛書簡

阿部から蘇峰への書簡は142通を数える。

◆展示拓本 徳富蘇峰筆「詣無仏塔詩碑」(東慶寺内)

富貴功名両漠然 忠誠一貫即安禅
寒梅翠竹人如在 相許相知五十年
詣無仏塔有作 蘇峰七十七叟

◆「阿部無仏翁肖像画」山田隆憲画 (一)遺族より(一)寄贈

逗子

ひらた とうすけ
平田 東助 嘉永2年〜大正14年(1849〜1925) 山形県

官僚政治家。藩校興讓館に学び、大学南校に進む。明治4年、岩倉使節団に随行し訪欧。山県有朋系の有力官僚として、貴族院議員・法制局長官・枢密顧問官・農商務相・内相などを歴任。特に産業組合法の制定、同組合の育成に尽力。

★明治23年、葉山との境の鳴鶴ヶ崎に別荘を建設、「鳴鶴山荘」と名付

けた。この別荘には多くの官僚・政治家が訪れている。逗子・葉山間の18行き来には海岸沿いの道しかなかったため、山腹に道をつけたり、地所を提供して切通しの道の整備に協力した。大正14年内大臣を辞任し、翌年鳴鶴山荘で亡くなった。

◆展示書簡 明治 年3月30日付

益御清康奉賀候 陳ば過日は拙病御見舞被下候処 折悪く有松参居り甚欠敬仕候不悪御諒恕是仰候 朶雲来示之件々は猶帰京之上篤と御相談申上度 粟屋之事は至極可然 委細は後日御協定可申候も 側に御定め置被下候て宜敷御坐候 別紙は「ピーロー」演説に対するホツシ一セ、ザイツング之各論に有之 知人より訳して寄書候間 貴紙に御上載被下候て如何と存候 書外万秘書官可申候 頓首
二月二十日 西涯
蘇峰老兄硯北

再啓 病痾日に増し快方以赴候間 幸に御放懐被下度候 敬具

封筒表 徳富猪一郎殿

封筒裏 相州逗子別邸、平田東助

とくとみ ろか
徳富 蘆花 明治元年〜昭和2年(1867〜1927) 熊本県

小説家。本名健次郎。徳富蘇峰の弟。同志社大中退。蘇峰の民友社に入り「国民之友」「国民新聞」に執筆。明治31年、長編小説『不如帰』で世に出、続いて『思出の記』、随筆『自然と人生』を書き名声を得た。

★『不如帰』の執筆時、徳富蘆花は逗子の「柳屋旅館」を定宿にしていた。逗子の浪子不動高養寺の前の海中には、昭和8年蘇峰の筆による「徳富健次郎之碑(表面)・不如帰(裏面)」の碑が建てられた。蘇峰と蘆花は長年不仲が伝えられていたが、蘆花臨終の際には蘇峰を電報で呼び寄せ、「日本一の兄だった」と仲直りし、その翌日に亡くなった。

◆展示書簡 明治45年1月1日付

新年芽出度祝上申候 兄上にも正に半百の御齡、愚弟の如きは真正の天下の喰つぶし者にて四十又五、なんか途方も無い年をとり願の髭に對しても甚慙入申候 昨年は楽敷く面白い事にて有之候 今年如何見物人には見わたしかつかぬも中々楽みな事に御座候 乍此上御若がへりを奉祈候 謹言

明治四十五之元日 健次郎

尊大兄座下

季雄段々御厄介をかけ申候 朝鮮にて落ちつけばよいかと存居候

封筒表 東京赤坂青山南町六ノ卅 徳富猪一郎様

封筒裏 千歳村 徳富健次郎

しょうりき まつたろう
正力 松太郎 明治18年〜昭和44年(1885〜1969) 富山県

実業家・政治家。大正13年、虎ノ門事件の責任を取って警視庁警務部長を辞任。同年読売新聞の社長となる。昭和9年、プロ野球球団「巨人軍」の前身にあたる「大日本東京野球倶楽部」を創設。同27年に日本初の民間放送テレビ局「日本テレビ」を設立。政界にも進出し、科学技術庁長官などを務めた。

★ジャーナリストの先輩として蘇峰を尊敬した正力は、逗子邸や麹町の「日本テレビ」へもしばしば蘇峰を招いた。

◆展示書簡 昭和22年3月31日付 鉛筆書き

先生 大変御無沙汰致シマシタ、御起居、如何御伺ヒ致シマス、次ニ私コト、入所以来毎日「野狐坐禅」ト宗教書ニ余念ナク親ソテオリマス 幸ニシテ一年数ヶ月、一度モ風邪ニ冒サシ多コトモナク、一回モ下痢シタルコトモナク、一回モ便通ヲ欠キタルコトナク頗ル元気デ、心身、共ニサワヤカテアリマス 御安心クダサイ 只タ世ノ急激ナ変

動フ見テハ感慨無量アリマス 国破レテ山河アリ今更ニ云フ可キ言 19

モアリマセン 終リニ臨ミテ先生ノ御清福ヲ祈リマス 敬具

封筒表 静岡県熱海市 徳富蘇峯大先生

封筒裏 東京都巢鴨町一丁目 正力松太郎 三月廿一日

おさき ゆきお
尾崎 行雄 安政5年〜昭和29年(1858〜1954) 神奈川県

政治家。号は雪堂。明治15年立憲改進党の創立に参加。第1回総選挙以来、連続25回当選、代議士生活63年。東京市長・文相・法相を歴任。大正2年の第一次護憲運動では先頭に立って活躍。“憲政の神様”と称された。

★昭和2年に逗子の披露山に山荘・「風雲閣」を構えた。戦後の「風雲閣」は訪問客に溢れ、宮中にも招かれ、新憲法案を自ら構想もした。昭和29年この地で死去。「風雲閣」のあった披露山公園には「尾崎行雄記念碑」が建てられている。

◆展示書簡 明治23年10月11日付

拜啓 貴紙意外の御災厄 何等の原因にや 反覆閲覧更に治安妨害の所あるを見ず 奇禍真に弔傷の至に御座候 本日の文学会へは無止差支有之 参会難仕候間此段御承知被下度 草々不尽 十一日 行雄 徳富老兄

封筒表 京ばし区日吉町民友社 徳富猪一郎様

封筒裏 東京府麹町区富士見町五丁目十三番地 尾崎行雄

とくがわ いえさと
徳川 家達 文久3年〜昭和15年(1863〜1940) 東京

政治家・公爵。徳川(田安慶頼)の三男。幼名は亀之助、号は静岳。慶喜

（隠退に伴い徳川宗家を継ぐ（第16代当主）。 版籍奉還により静岡藩知事・貴族院議長・ワシントン軍縮会議全権委員・日赤社長をはじめ各種団体の名誉職に推される。

★逗子の桜山に建つ逗子市郷土資料館の建物は、大正元年に横浜の実業家の別邸として建築されたと伝えられ、大正6年からは、家達の別邸として使われた。

◆展示書簡 明治44年5月9日付

此程御話致候貴下御写真早速御送付被下忝く存候 御申越二任せ拙影一葉御廻申候御落手希候 右要用迄如此御座候也

五月九日

家達

徳富猪一郎殿

封筒表 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 明治四拾四年五月九日 豊多摩郡千駄ヶ谷町 公爵徳川家達

佐久間 貞一 さくま せいいち 嘉永1年〜明治31年(1848〜1898) 東京

実業家。安井息軒に学ぶ。明治9年大日本印刷の前身、秀英舎を創立。明治23年創刊の国民新聞の印刷も民友社内に出張工場を設けて行った。労働問題に関心が深く、労働組合期成会の評議員をつとめる。また工場法制定に尽力した先覚者としても知られている。日本のロバート・オーエンとも称された。

★佐久間の別荘は蘇峰の逗子別邸「老龍庵」のすぐ近くにあった。

◆展示書簡 明治29年5月17日付 (葉書)

拝啓陳者徳富君送別会 野生も参会仕度此度加入御取計被成度此段奉願候也

二十九年五月十五日 牛込区二十騎町 佐久間貞一

葉書表 麴町富士見町富士見軒 徳富氏送別会御中

東郷 平八郎 とうこう へいはちろう 弘化4年〜昭和9年(1847〜1934) 鹿児島県

軍人。海軍大将・元帥。戊辰戦争では新潟・函館に転戦。明治4年英国留学。日清戦争では「浪速」艦長として豊島沖、黄海、威海衛などに出击。日露戦争では連合艦隊司令長官となり、「三笠」に座乗し、日本海海戦でバルチック艦隊を全滅させた。のち、軍令部長・東宮御学問所総裁を歴任。

★東郷は横須賀に近い逗子の地を愛し、この地に別荘を建てた。

◆展示書軸

東郷平八郎筆 「山唄万歳聲 為徳富大人 八十七歳 平八郎書」

(「漢書」武帝紀の「山唄万歳声」と同意か。祝語)

徳富蘇峰筆 「山唄万歳声 蘇峰七十四叟」

(東郷と蘇峰は熱海の定宿も同じ「古屋旅館」で親しく交友を持った)

◆新聞コラム(東京日日新聞「日日だより」)

・「謙讓の美德 西郷と東郷」(昭和7年7月8日)

・「東郷元帥一週年忌」(昭和10年5月31日)

蘇峰はしばしば東郷について新聞コラムに記した。

葉山

たかはし これきよ

高橋 是清

嘉永7年〜昭和11年(1854〜1936) 東京

政治家・政治家。号は菝庵。日本銀行総裁・蔵相を経て、第20代内閣総理大臣・政友会総裁などを歴任。昭和初期にも蔵相を務め、金融恐慌・世界大恐慌に対処。昭和11年の二・二六事件で暗殺された。

★高橋是清の葉山別荘は、富士の眺望で有名な真名瀬に明治32年、日銀副総裁在職時に建てられた。現在は特別養護老人ホームになっている。一角には「葉山交流館」として是清の資料などが残されている。

◆展示品 大正12年6月12日(座席表に鉛筆で書き込み)

座札裏 蘇峰学人の恩賜賞を授与せられたるを祝ひて

身にあまるうれしさつつも夏衣 菝庵

席札表 高橋様

(注)大正12年6月12日帝国ホテルに於いて、清浦奎吾、後藤新平、

野田大塊らの主唱で開かれた、蘇峰の学士院恩賜賞受賞祝賀会の座席札に書かれた祝いの句

金子 堅太郎

嘉永6年〜昭和17年(1853〜1942) 福岡県

政治家。大日本帝国憲法の起草に参画。伊藤内閣の農商相・法相を歴任。

日露戦争中、米国に特派され、講和に貢献。のち、枢密顧問官。日本法学校(現日本大学)の初代校長。

★明治27年に葉山御用邸が造営されると、大正8年、付属邸(澄宮御殿として利用される)が建てられた。この付属邸は現在「葉山しおさい公園」となっており、もともとこの地付近には金子の別荘の他、岩倉具定、井上毅の各別荘もあった。

◆展示書簡 明治43年3月27日付

先日來別荘に参り候処四囲之春色悉く詩情ならざるはなし 天氣晴朗なれば庭園に出で落花を踏み残鶯を尋ね 又冷雨濛々なる時は書齋に入りて古今の書籍を抜読し 塵外の生活を相樂み居候 安樂椅子に横臥之際壹首浮み出候間供尊覽候 御叱正奉希望候

葉山偶感(憲法発布之感築此別荘)

二十年前小邸園 臨池笑見白鬢繁

廬中有米樽中酒 愧我無功背聖恩

蘇峰学契 溪水生

三月廿七日

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 相州葉山村 金子堅太郎

小村 寿太郎

安政2年〜明治44年(1825〜1911) 宮崎県

政治家・外交官。外相となり、対英米協調を主軸に大陸進出を図る小村外交を確立。日英同盟締結、日露戦争後のポーツマス講和条約、韓国併合、関税自主権の回復に当たった。

★小村寿太郎は退任後、葉山の一角で3ヶ月の療養生活を送り亡くなった。その借家の門脇には、「小村寿太郎終焉の地」碑が故郷宮崎の飢肥に向って建てられている。

◆展示書簡 明治(30年) (月)27日

拜啓 過日御談話有之候件に關し在京城加藤弁理公使へ及問合候処別紙之通返電有之候に付右写差進候条御落手之上貴省大臣閣下へ御披露被下度。尤も右電信は秘密に付し被置度候 早々敬具

十一月十七日 小村寿太郎

徳富参事官殿

〔別紙〕

明治三十年十一月十六日午後三時三七分発

〃〃 五時三十分着

貴電第九十八号の件は全く無根の風説なり。尤も韓廷に対し不満を懐く者共に於ては廃帝の意気を漏す者予てより之れあることを聞居たるが、右等の輩が大葬時に乘じ非拳を企つるやも知れずとの考より、偶々投機者の計略に依て斯く大業なる浮説を伝へらるゝに至りたるものならん

別紙は外務省罫紙 「外務省用」封筒

封筒表内務省 徳富参事官殿

封筒裏小村外務次官

桂 太郎 弘化4年〜大正2年(1848〜1913) 山口県

軍人・政治家。陸軍大将。陸軍にドイツ兵制を取り入れ、陸相を歴任。3度首相となり、日英同盟・日露戦争・韓国併合を断行。大逆事件を初め、社会運動を弾圧した。

★桂太郎は葉山一色の別荘「長雲閣」にひそかに閣僚や元勳達を招集し、日英同盟締結の密議を凝らした。

◆展示書簡 明治()年()月7日付

御一覽後直に御返納相願候也

七日 太郎

徳富老兄侍史

〔別紙〕

日英同盟協約案の原稿葉山村子爵邸に協議のため、当時の伊藤侯爵金沢別邸より来られ 侯爵子爵協約案を議し了り 子爵は別邸の命名を侯に乞 侯之を諾し 直に長雲閣と命じ 即ち長雲閣の額を書し 併

して此詩を作也
封筒なし

神田 鍾蔵 明治5年〜昭和9年(1872〜1934) 愛知県

実業家。名古屋で株式仲買人となり、明治32年上京して紅葉(もみじ)屋銀行を創設。証券業をいとなみ、公債の海外売り出しなどで巨利を得た。大正7年神田銀行と改称したが、昭和2年の金融恐慌で閉鎖に追いこまれた。

★明治43年、逗子開成中学が七里ヶ浜ボート遭難事故で財政危機に陥った際、同中学校の財政監督に就任。負債の一部を肩代わりしたと伝わる。

◆展示書簡 大正12年7月20日付

パリ・シャンゼリゼ通りの絵葉書に「巴里 神田雷蔵」とある

葉書宛先 東京市赤坂青山南町六の三十 徳富猪一郎様

鈴木 三郎助 慶応3年〜昭和6年(1868〜1931) 神奈川県

実業家。ヨード製造業を経て、明治41年、池田菊苗が発明した新調味料の特許権共有者となり、翌年工業化し「味の素」として発売。大正14年、鈴木商店(現味の素)を設立。森蠶起とともに昭和肥料(現昭和電工)を創立した。

★今の「葉山マリーナ」が立つ場所には、ヨードを海藻から作る「鈴木製薬所」があった。「葉山マリーナ」は三代目三郎助により、昭和39年開業された。鈴木三郎助の自宅はマリーナ(工場)を見下ろす山寄りに建てられていたそうだ。二代目、三代目の三郎助は、ともに葉山町の教育環境の充実に尽くし、名誉町民となっている。

◆展示書簡 昭和3年11月3日付電報

ツツシミニテ「ツシヨクンヲシユクス ススキニロウスケ

(蘇峰は昭和3年11月10日、御大礼に参加し、勲二等に叙せられ、瑞宝章を賜わった。その事に対する祝電である。)

はっとり きんたろう

服部 金太郎 万延元年〜昭和9年(1860〜1934) 東京

実業家。東京日本橋の時計店に勤め、修理技術を学ぶ。明治14年、「服部時計店」(現服部セイコー)を創業。明治25年には時計製造工場の「精工舎」を新設する。大正6年株式会社に改組、社長となり「時計王」といわれた。貴族院議員。

★服部別荘は、森戸神社に近い堀内にあった。

◆展示書簡 大正13年2月16日付

拝啓益御清栄奉賀 陳者去十四日帝國ホテルへ御患招を蒙り大谷光瑞師之有益なる御講演を拝聴し感佩之至に奉存候 不取敢御礼まで如此に御座候 敬具 二月十六日 服部金太郎

徳富猪一郎殿

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社長 徳富猪一郎殿

封筒裏 東京市芝区白金三光町四百九十八番地 服部金太郎

ことつ しんへい
後藤 新平 安政4年〜昭和4年(1857〜1929) 岩手県

医師。政治家。安場保和に認められる。満鉄初代総裁となり、植民地経営に活躍。逓信・内務・外務各大臣、東京市長などを歴任。関東大震災直後は帝都復興院総裁として東京の都市計画整備の先頭に立ち、日ソ国交回復にも尽力した。

★森戸海岸近くの「鍵屋旅館」(現中華料理店「海狼」)脇に後藤別荘は

あった。

◆展示書簡 明治41年2月7日付

日々盥嗽了れ八門前郵夫の到るをまつ 今朝も亦倚欄門外を望む暫にして彼来る 即貴翰並唐人万首を領す 俗人固よりは是等蔵書なし 珍重々々宜しく家什とすべし 無遠慮拝領致候 余に此様な珍本を見ると幼学便覧三味もはつかしく相成 縮入候かと存候 先は右まで 草々不尽

二月七日

新平

蘇峰先生大人侍曹

追啓 一昨日来咽喉漸次よろしく 隨而腎臓炎も減退の気味と見え尿中理化学的検査成績次第によろしく候 乍余事御放慮之程奉願上候以上

封筒表 東京赤坂区青山南町 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 伊豆修善寺 後藤新平

◆展示書軸読み下し

徳富仁兄大人雅囑

厭はず 身を兎戯の中に投じ 悠然自適して 蒼穹に嘯くことを舞ひに手莫く 踏むに足無きも 任他 顛倒して西し東せん 千廻万転 渾て管せず 莞爾として躍起し 躬を直くする没し 群童紛々として 愛憎半ばし 力を竭して压制するも 功無き所 是れ造化は本玄妙なること莫からんや 平陂往復は古今同じきなり 眼前の困厄 問心所に非ず 理直く気壮にして 鴻蒙を塞がんや 誠し老天の能く我を識る有らば 年を経月を閲して 双攻に対せん 物立つ所を得なば 自から動かす 人知の処る所 常に窮せず 君開かずや 事を作すには 唯宜しく始終を全うすべしと 浮雲変幻 瞥眼空し 仮令体滅するも 理は長久 愛憎は畢竟一時の風 嗚呼 衆人一たび倒れなば再起し難

く 誰か是れ人間の不倒翁なる
明治戊申（四十一年）秋 新平録旧製

たかさき まさかぜ
高崎 正風 天保7年～明治45年(1836～1912) 鹿児島県

歌人。鹿児島藩士高崎温恭の長男。父はお由羅騒動といわれる藩の内紛のために切腹、正風は流島となる。明治4年新政府に出仕。宮中顧問官、枢密顧問官を歴任。また御歌所初代所長として、明治天皇の御製を点した。温雅流麗な歌風と能筆で知られる。初代国学院院長。

★高崎の別邸は葉山の堀内にあり、海が見渡せる山側に建てられていた。

◆**展示書簡** 明治37年10月29日付

「禁庭菊」

もろこしの海にくぬかにかをるなり

おほうちやまの幾久のしたかせ

封筒表 東京々橋区日吉町国民新聞社徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 十月廿九日相模国三浦郡葉山村字堀内 高崎正風

いりさわ たつきち

入沢 達吉 元治2年～昭和13年(1865～1938) 新潟県

医学博士、内科医。ベルツに師事に、無給内科助手となる。ドイツに私費留学。東京帝国大学教授、東京帝国大学附属医院長・同大学医学部長・宮内省侍医頭等を歴任、日本の内科学確立に貢献。

★侍医頭として、葉山の御用邸で静養中であつた大正天皇の病氣治療にあつた。森戸神社には、入沢の撰文により、葉山の恩人・ベルツ博士等を顕彰した碑が建てられている。

◆**展示書簡** 大正15年11月30日付

拝啓益御安泰奉恭賀候 陳者此度高著頼山陽御惠贈を辱し乍毎度御
芳情難有奉感佩候爰一以書中厚く御礼申上候 勿々敬具
十五年十一月卅日 葉山ニテ 入沢達吉

蘇峰先生 侍曹

追啓

一兩日前貴紙夕刊ニテ尾崎紅葉集に関する高文拝読仕り候 廿餘年前の旧事を想起致候 紅葉氏病より小生受持の病室に入られ 各種の検査完了候ニ付 或日之夕刻(高篇ニヨリ三十七年三月十三日ナルヲ知り候)小生病院退出ノ砌紅葉氏ノ室ノ戸を覗ニ叩カントシタル利那 小生ノ頭ニせめて今夜一晚紅葉氏をして安眠セシメントノ念浮ビ候故其儘室に入らずして退出 即ち偶其夜フ何かの会合あり港町の一橋亭にて森鷗外氏ニ面会申候テ紅葉氏の病状を尋ねらし候故 愈々口も決定セリ儘 明朝登院して宣告致す積り口口ニト話候事記憶に存じ居候 御繁用中聲言相認め候段御悔申上度存居候也

封筒表 東京府下大森山王 徳富猪一郎殿

封筒裏 相州葉山堀内 入沢達吉

なごじり まいし

斉藤 実 安政5年～昭和11年(1858～1936) 岩手県

海軍軍人・政治家。五・一五事件後の昭和7年、犬養内閣の後を継ぎ、第30代内閣総理大臣として「挙国一致内閣」を組閣。満州国建設・国際連盟脱退など強硬外交政策を展開したが、帝人事件により総辞職。昭和11年の二・二六事件により暗殺された。

★現在の一色小学校近くの一色地区に別荘を構えた。

◆**展示書簡** 昭和()年5月21日付

拝啓 陳八尊臺今般旅順大連方面へ御旅行ニ付テハ既ニ私信ヲ以テ右各長官へ申進置候得共 当別封紹介書送付申上候 条御携帶相成候様

致候 此段得貴意度 早々頓首

五月廿一日

徳富猪一郎様

封筒表 青山南町六丁目三十 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 海軍省 斎藤実

斎藤実

団 琢磨

安政5年〜昭和7年(1858〜1932) 福岡県

工学者、実業家。男爵。アメリカで鉱山学を学び、三井三池炭鉱の経営を行う。経営を成功させ、三井財閥の総帥となった。三井合名会社理事長、日本工業倶楽部初代理事長などを歴任した。三井本館入口で血盟団団員に暗殺された。蘇峰は新聞コラムで「実業界に於ける大損失」と団の死を惜しんでいる。

★団は田舎家を好み、葉山の別荘は民家を移築して改造を加えたという。関東大震災の日、葉山の別荘で静養中だった団は親友・栗野慎一郎の葉山別荘を訪ねていた。栗野の家が倒壊する寸前に家から脱出し、一命を取り留めたとの逸話が残されている。

◆展示書簡 昭和3年12月20日付

拝復 時下益々々候益御清穆奉慶賀候 陳者今秋御大礼被為行候際 不肖不料も授寿之御沙汰を蒙り 天恩之優渥なる只管恐懼之至リ二奉存候 右二付早速慰懃なる御祝詞並二斯界二多大之賞讃を博せられ候大著近世日本国民史既刊全部御惠贈を恭つし候段 光栄不過上右好固之記念として襲藏永く御芳志相伝へ可申候 乍略儀以書中不取敢御礼申上度 如此御座候 頓首

十二月廿日

徳富猪一郎殿 侍史

封筒表 府下入新井町新井宿二八三一 徳富猪一郎殿 御礼

封筒裏 市外千駄ヶ谷町原宿三四四 団琢磨

井上 毅

天保14年〜明治28年(1844〜1895) 熊本県

政治家。号は梧陰。明治4年司法省に出仕。明治5年渡欧して司法制度を学ぶ。大久保利通に登用されて頭角を現し、岩倉具視の側近として明治十四年の政変を画策。伊藤博文のもとで大日本帝国憲法、皇室典範、教育勅語などを起草した。

★井上別荘は、現在の「葉山しおさい公園」の一角に建てられた。明治26年8月26日の夕刻、蘇峰は逗子から徒歩にて金子堅太郎邸に向かう際、井上邸にも立ち寄った。その時の様子が「国民新聞」の「逗子たより」に「相模灘の月色」と題して記されている。

◆展示書簡 明治(26)年3月8日付

懇々之御教示致多謝候 平生所見之異同あるに係らず今後も嚶鳴之教を垂るゝことを惜まずんば 豈啻一県人士の幸のみならんや 御病氣之由 御保養専一存候 草々頓首

三月八日

徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂氷川町五 徳富猪一郎殿

封筒裏 牛込 井上毅

井上毅

岩倉 具定

嘉永4年〜明治43年(1852〜1910) 京都府

岩倉具視の次男。公爵。戊辰戦争に従軍し各地を転戦。明治3年アメリカに留学し、帰国後政府に出仕。帝室制度取調委員、貴族院議員、学習院長、枢密顧問官。明治42年に宮内大臣。

★岩倉別荘は、現在の「葉山しおさい公園」の一角に建てられた。展示

書簡中にある「岩倉公実記」(上巻(下巻は、1階書棚に収められている。)

◆展示書簡 明治(36)年12月22日付

拝啓 時下益御清適大賀之至存仕候 陳者御約束に依り岩倉公実記吉部為持差出候御領収可被下候 敬具

十二月廿二日 岩倉具定

徳富猪一郎殿

封筒表 徳富猪一郎殿

封筒裏 岩倉具定

横須賀

よしだ くらさう

吉田 庫三 慶応3年〜大正11年(1867〜1922) 山口県

教育者。吉田松陰の甥。号は梅城。吉田家第11代当主。7歳のときに松下村塾に入り、松陰の叔父の玉木文之進の教えを受けた。学習院で初めて教鞭をとる。高等師範学校中学科、陸軍幼年学校、商船学校(現東京商船大学)で教え、神奈川県第二中学校(現県立小田原高等学校)、神奈川県立第四中学校(現神奈川県立横須賀高等学校)の初代校長を歴任した。

★吉田が神奈川県下二校の校長に就任したのは、当時の神奈川県知事と同じ長州出身の周布公平の招聘によるものであった。今も県立横須賀高校の玄関脇に「吉田庫三先生」胸像が建っている。

◆展示書簡 (明治41年11月4日付)

拝呈 高著早速御寄示被成下口手揮処即夜通読致候 今更高著に對して批評すべき詞は無之候へとも生の最敬服且驚喜致付仁兄の松陰研究

に於る御識見大進歩成下され御事にて実に仁兄の精微周密なる觀察 26

は流麗にして簡明なる文章と相待ちて欲深き生の目にも曾祖の人物を遺憾なく發揮せられ大なるものと拝見致候 其の真偽は天下後世二見るへからざる事と断念羅在候処 恰も五十年祭二当たりて此の好著を得候は無上の快心事に御坐候 先は読余匆卒吉筆妄言高怒被下度 書

外万拜晤奉期候 拝具

曾祖五十年祭の前五夜

蘇峰仁兄大人 侍史

封筒表 東京京橋日吉町民友社 徳富蘇峰先輩 侍史

封筒裏 ヨコスカ力市仕野一五二 吉田庫三

やまもと えいすけ

山本 英輔 明治9年〜昭和37年(1876〜1962) 鹿児島県

海軍大将。山本権兵衛の甥。海軍大学校長、連合艦隊司令長官、横須賀鎮守府司令長官といった要職を歴任。昭和6年海軍大将、軍事参議官。陸軍の皇道派と親しく、昭和11年、二・二六事件の際には首相候補にあげられた。

★大正7年からの1年間、戦艦「三笠」の艦長を務める。

◆展示書簡 昭和14年8月8日付

拝呈 立秋とは申しながら炎暑尚凌ぎ難く御病体にては嘸かし御難儀のことと奉推察候 併し遂日御快復のこと御喜び申上候 扱て小生五月下旬より六月初にかけて内外の情勢見るに忍びず牧野伯(牧野伸顕、内大臣(湯浅倉平)、首相(平沼騏一郎)、近衛公(近衛文麿)に御面謁を乞い内外の情勢に關し愚見申進め得に日独伊問題に關しては至急同盟を締結すべしと主張致し置き候 然るに其後二ヶ月を経過するも一向実現されず 国際情勢は小生の予測の通りに現はれ来たり 我国は特に一大危機に直面せる感有之 依て再び御面謁御願ひ進言致さんと決心

せしも近衛公は軽井沢にあり内大臣は葉山にあり首相も御多忙と存じ遂に書面を以て去る五日前記四公に宛て意見書御送り置き候 小生も十一日頃東京発鹿兒島に老母を訪ね度帰鹿仕候につき書面を以て差出したる次第に御座候 写し一通先生の御参考までに御送り申候 先は其の積りにて先生御一人丈けにてご覧の上御納め置き被下度 万一御不用に候はば御一覽後御返信被下度 先は右要用まで如斯御座候 折角御静養專一に奉祈候 敬具

八月八日

山本英輔

徳富蘇峰先生

本書面は発送致さず其俣に致し置き候為十日頃御退院の趣き且つ小生も本十一日東京出發帰省仕り候に付き 別紙写しの通り再度四公に宛て書面差上候間之も併せ御参考までに御一覽に供し申し候 八月十一日

封筒表 大森区山王一ノ二八三二 徳富蘇峰先生 御直披

封筒裏 東京市品川区北品川三丁目三二番地 山本英輔

こいずみ またじろう
小泉 又次郎 慶応元年〜昭和26年(1865〜1951) 神奈川県

政治家。小泉純一郎の祖父。号は六浦荘人。新聞記者、眞議などを経て、衆議院議員となる。立憲同志会、憲政会、立憲民政党に所属し大正10年代の普通選挙運動に尽力した。衆議院副議長・民政党幹事長・浜口・第二次若槻内閣の通信相。小磯内閣顧問などを歴任。

★昭和9年からの1年半横須賀市長を務めた。昭和40年3月、又次郎の娘婿で、防衛庁長官や国務長官を務めた小泉純也氏により、金沢区大道に「小泉又次郎生誕地」碑が建てられた。

◆展示書簡 〇年2月9日付

拝啓 聖徳太子殿堂建立之件につき、高橋鼎氏を御紹介之為寸時御割

愛御引見之栄を賜り度伺貴意致候 敬具 二月九日 小泉又次郎
徳富先生 机下

封筒表 民友社 徳富先生 高橋氏持参

封筒裏 東京市淀橋区西大久保二ノ三四二 小泉又次郎

展示品

◆徳富蘇峰撰書 鎌倉瑞泉寺「松陰吉田先生留跡碑」の原拓

碑表 松陰吉田先生留跡碑

碑裏 瑞泉寺竹院上人松陰吉田先生伯父也 先生訪上人於瑞泉寺前後四回 其在桵山獄也賦詩曰山光竹色入窓青方丈幽深倚錦屏今我為囚空憶昔月中一夜叩雲扃可以知先生魂魄存于此地也矣昭和四稔四月 蘇峰菅原正敬撰并書

「本文訓読」

瑞泉寺の竹院上人は松陰吉田先生の伯父なり。先生上人を瑞泉寺に訪ふこと前後四回なり。其の桵山獄に在るや、詩に賦して曰く「山光竹色窓に入りて青し 方丈幽深錦屏に倚る 今我囚と為りて空しく昔を憶ひ 月中一夜雲扃を叩く」と。以って先生の魂魄此の地に存することを知る可きかな。

昭和四稔四月 蘇峰菅原正敬撰書を并す

★碑は昭和4年に鎌倉瑞泉寺山門前に建築された。

◆徳富蘇峰著 「吉田松陰」(民友社・明治26年初版)

「吉田松陰」(岩波文庫)

◆蘇峰書「俺濃恋人誰かと思ふ 神能造りた日本国 伊豆山人」

蘇峰が愛したこの都都逸は逗子の田越川沿い(蘇峰の逗子別荘近くに歌碑として建てられている)。

展示パネル

☆徳富蘇峰の逗子別荘桜山・老龍庵付近からの眺望

☆徳富健次郎之碑(絵葉書・表面)

☆不如帰(徳富健次郎之碑 裏面)

☆海側砂丘上より見た鎌倉海浜院ホテル(明治40年頃 鎌倉中央図書館提供)

☆江ノ電 七里ヶ浜より富士山を臨む(絵葉書・鎌倉中央図書館提供)

☆東洋一のサナトリウムと称された南湖院での療養風景(絵葉書・茅ヶ崎

市提供)

参考文献

・『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株)三省堂

・『大人名事典』 平凡社

・『鎌倉別荘物語』島本千也

・『海辺の憩い 湘南別荘物語』島本千也

・『鎌倉の失われた風景』島本千也

・『逗子の別荘地時代 明治く大正期』島本千也

・『葉山町の歴史と暮らし』葉山郷土史研究会

・『蘇峰自伝』徳富猪一郎

・『第一人随録』徳富猪一郎

・『蘇翁感銘録』徳富猪一郎

・『我が交遊録』徳富猪一郎

・『藻塩草』藤原楚水

・近代日本史料選書「徳富蘇峰関係文書」酒田正敏・坂野潤治他

・国立国会図書館「近代日本人の肖像」

・wikipedia

末尾となりましたが、今回の展示に関して以下の方々に協力いただきましたのでここに謝意を表します。

鎌倉市中央図書館・平田恵美氏・中田孝信氏、島本千也氏、鎌倉文学館、鎌倉東慶寺、清河八郎記念館・廣田幸記氏、栗原健成氏、塵外館の皆様、茅ヶ崎市生涯学習部、茅ヶ崎太陽の郷、鶴沼郷土資料展示室・内藤喜嗣氏、逗子市郷土資料館、陸奥祥子氏、山本陽一氏、泉立横須賀高等学校・本名隆一郎氏、小宮一夫氏、阿部正夫氏、楠正昭氏(順不同)

本年度の企画展 (1Fにて開催)

明治維新百五十年記念企画「維新の志士12人からの手紙」展

明治維新に功績のあった12人からの書簡を4回シリーズで展覧します。

展示書簡

- ① 1月5日(金)～3月31日(土) 勝海舟、アーネスト・サトウ、田中光顕
- ② 4月6日(金)～6月30日(土) 伊藤博文、西園寺公望、元田永孚
- ③ 7月6日(金)～9月30日(日) 山県有朋、井上馨、陸奥宗光
- ④ 10月5日(金)～12月24日(月) 大隈重信、渋沢栄一、グイド・フルベッキ

平成30年1月5日発行 定価200円(税込)

編集 塩崎 信彦 宮崎 松代

発行者・発行所 (公財)徳富蘇峰記念塩崎財団 代表理事 高野 信篤

〒251-0123 神奈川県中郡二宮町二宮605

Tel 0463・71・0266 Fax 0463・71・0677

ホームページ <http://www.soho-tokutomi.or.jp/>